

---

# それでも、僕は

夏生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それでも、僕は

### 【Nコード】

N0471D

### 【作者名】

夏生

### 【あらすじ】

生きたい。……逝きたい。二つの想いが、交錯し僕を狂わす。

## プロローグ

\*

知らない間に、きっと何かを忘れてしまっていくんだろうな。

声にならない叫びは、喉を掠めて吐息となって零れゆく。

複雑化したセカイの中。……答えはきっと、シンプルなはずなのに。

言葉にすることさえ出来ない「弱さ」を抱いて、僕は答えを探して彷徨った。

色付いては消えていく景色を何度も越えて、何億・何千の中にある僕の“居場所”を探した。

ただ、君の愛が欲しいだけなのに。

悩んで、傷ついて、傷つけて……全てを失って、何かを得て。

過ちを繰り返して、それでも僕は君を求め続けた。

現在の僕を支えるものは、過去の僕と君の存在。

僕がもし、

……命尽きるその時には、隣で君だけ静かに微笑っていて欲しい。

“ 362 × 2 〓 タイムリミット ”

僕のタイムリミットはあと、二年。

十六年間ずっと、動き続けていた僕の心臓はもう疲れきってしまったらしい。

……だから、あと二年。あと二年間だけ頑張ると、僕に時間をくれた。

＊

余命を宣告されたのは、今から半年前。

宣告、なんかじゃなくて僕が聞いてしまったのが、始まり。

『ご両親には大変お辛いお話になりますが……』

僕の心臓は、もう二年も持たないこと。心臓移植の例。成功率。

日本での手術が困難なこと。治療費の額。

決して感情的な口調じゃない、医師の話を聞く。聞くんじゃ

なくて、その場から動けなくて、何もしなくても耳に入ってきた。

その時、思った。

もう、終わりなんだなあって。

涙なんて出なかった。涙より、恐怖の方が先だった。

ガクガクと震えだす膝。壁に凭れかかって、瞳を閉じる。僕に迫

っている、本当の闇はどんなものなのか、想像した。

「蓮、もう少し入院が必要みたい。さつき、高松先生と話してきたの」

少し腫れた瞼を隠すように、いつもより少し濃い化粧の母さん。さつきの話が夢じゃないことを、僕に教えていた。

（ごめん。……ごめんね。父さん、母さん）

子供が欲しくて、欲しくて。不妊治療までして、僕を生んで育ててくれたアナタ達に僕は、悲しみしか与えてあげられてない。

本当はもっと、笑顔や幸せを与えてあげたいのに。

（ごめん……）

真っ白なシーツを握り締める。悔しさと、悲しさが入り混じった気持ちで僕は、母さんに笑顔に向けた。

「そうなんだ。……早く学校、行きたいな。心配かけて、ごめんね。父さん、母さん」

父さんの瞳の奥が揺れる。母さんは「何言ってるのよ、学校なんかすぐに行けるわ」と呟くように言ったあと、僕の視線から逃れるように林檎をむき始めた。

気付いてるよ。

涙を堪えて震える肩。嗚咽を必死にかみ殺す、唇。

「心配するのが、親の役目だよ」

優しく父さんが笑う。目じりに皺が出来て、優しく笑う父さんの笑顔が好きだった。でも、今日の笑顔は瞳の奥に、涙を隠してた。僕が、そんな顔をさせた。

\*

「また、明日来るから。ちゃんと寝るのよ？　あと、何かあったらナースコールしてね」

消灯時間の十時を針がさす。

共働きの両親。　ずっと病室に泊まり続けることが、許されないことを僕は知っていた。

何度も「暫くは、蓮と一緒に居ようかな」と、病室に泊まろうとする母さんを「大したことない病気なんだから、いいよ」と何度も断った。

名残惜しそうに、そして何処か心配そうな顔をして父さんと母さんは出て行った。

なんで、今更。

「……つく、ふえ……ああ」

涙が、零れてくるんだろう。

遠ざかるゆっくりとした二人の足音を聞きながら、溢れてくる涙を拭う。

泣くな。

泣くな。

泣くな。

唇を噛んで、嗚咽を殺す。

……嗚呼。

二年後にはもう僕は、あの人達の傍に居ない。

明日も朝が、来るのかな

自分の終わりを知って、精一杯生きる人間と、  
自分の終わりを知らないで、何も知らないで死んで行く人間。

どちらが、幸せなんだろう？

残して逝く人と、  
残される人。

いったいどっちが、辛いんだろう？

\*

「やつほーっ！ 見舞いに来てやったぜ」

病室のドアが荒々しく開いて、やけにハイテンションな声が聞こえる。そこから顔を覗かせたのは、僕が学校でいつも一緒に居る北城だった。

我がもの顔で、ソファーに陣取って座る。

僕はその様子を眺めながら、この光景が何回見られるんだろう？  
と心の中で自問した。

「ありがと。……何、その顔」

それなりに整っている彼の顔の左頬は少し腫れていた。はははつと乾いた笑い方を彼はして、「美咲にやられちゃった」と自分の頬に触れた。

美咲は北城の彼女で、背が高いポニーテールが似合う女子。活発で女らしくないサバサバした性格が、男女問わず人気があった。



「なんで？」

「いや、なんかね、うん。……まあ、気にしないで」

僕の肩をポンポンと叩きながら、北城は苦笑する。僕もつられて苦笑して「分かった」と彼の頬を見つめながら言った。

「つーか、俺より。大丈夫なの、蓮は」

一度、僕の右腕に繋がっている点滴の管を見つめた後、僕の顔を覗き込みながら、心配そうに呟いた。涙腺が緩む。目の奥がじわりと熱くなった。

「ん？ 僕は、平気。もうすぐ、退院……出来るんだってさ」

心とはま逆の笑顔を作って、彼を見つめる。暫く彼は、僕の瞳をじつと見つめた後「そっか。じゃあ、また一緒にサッカーしような」と呟いた。

北城は暫く黙っていたが、「俺、そろそろ帰るわ」とソファーから立ち上がった。僕はその様子を見つめて「うん」と頷く。

これ以上、北城と一緒に居てちゃんと笑える自信なんてどこにもなかった。

「またな」

僕に優しい笑顔を向けて、ひらひらと手を振る。病室のドアノブを北城は、握って静止した。そして、ゆっくりと……こちらに振り返る。

「また、来るから」

去っていった北城の笑顔が歪んだ気がした。

それは僕の瞳を覆ってしまった涙が原因なのか、北城の顔が本当に歪んだのか。

なあ、北城。

僕は何回、君と話せるだろうか。君と笑えるだろうか。

もし、二年しか僕が生きれないと知ったら君は、どうするのかな。

夜、父さんと母さんが病室に来た。目の下にクマを作っているのに、それでも明るく振舞っている両親を見て心が軋んだ。

「今日は、もういいから」と二人を追い出すように押し出して、ベッドに潜りこむ。足音が完全に遠ざかったのを聞いてから、テレビをつけた。　　静粛は僕を追い詰めるから。

「蓮君。もう遅いから、寝ようね」

見回りにきた看護婦の高階さんに言われて、僕はテレビと電気を消した。「おやすみ」と高階さんは僕に言って、病室から去っていく。

時計の音がやけに気になって、眠れない。

眠るのが怖い。

今まで当たり前に来ていた明日が、僕にはもう来ないかもしれない。

約束されていない明日が来ることを信じて、瞼を閉じる勇氣なんて僕には無かった。

瞳を閉じるのが怖い。

まだ、やりたいことがたくさんあるのに。

まだ、していないことがたくさんあるのに。

明日の朝も、僕はちゃんと生きているのかな。

## 空に近い、場所

受け入れるしかない。

受け入れるしかない、んだ。

いつの間にか寝ていたようで、目が覚めると空には太陽が昇っていた。自分の身体を確認する。右手を心臓の前にあてて、鼓動を確認した。

生きてる。

自分に朝が来ることが、自分が今、生きていることが、素直に嬉しかった。

生きていて、良かった。

病院の屋上へ向う。病院の六階にある屋上まで、階段で昇った。息切れさせながら、ゆっくりと昇っていく。身体の体温は上昇して、心臓の鼓動が大きく聞こえる。自分が本当に今、生きているんだなあ、と実感した。

“立ち入り禁止”と張り紙がされているのを無視して、ドアノブをひねる。鍵がかかっていて、ドアは開かなかった。

「屋上、入りたいの？」

後ろから声が聞こえた。振り向くと黒髪を肩くらいまで伸ばした、色白の少女が立っていた。

「……うん。空が、見たくて」

僕がそう答えると、少女は短いスカートのポケットから鍵を取り出す。そして、ドアにその鍵を入れて、右へ回した。カチャリ、

と音がしてドアが開く。

屋上は何も無い場所だった。

二メートルはあると思われる柵があるだけの、殺風景な場所。でも、病院では一番、空に近い場所だった。

「あたし、美羽。大塚 美羽って言うの。君は？」

ふわりと優しく微笑んで、彼女は僕の隣に腰を下ろした。僕は彼女を見つめてから、「僕は、片瀬 蓮」と答えて、屋上のコンクリートの床に寝そべった。空は青くて、白い雲が水彩のように見える。

「んー、じゃあ蓮君って呼ぶね。あたしは、美羽でいーよ。……蓮君はどうして、屋上で空を見たかったの？ 何処からでも、見上げれば空は見れるでしょ？」

美羽の問いかけに、僕は答えようか迷ったが暫くしてから口を開いた。空をじっと見つめたまま。

「この病院の中では、此処が一番空に近い場所だから。天国が一番近いかなあって思ってた」

美羽は驚いたように、大きな目を見開いて僕を見つめている。大きな瞳は次第に潤んできて、美羽の頬に涙が伝った。僕は驚いて、え？ と声を漏らす。

「なんで、泣いてるの？」

僕が尋ねると、美羽はごめんね。と呟く。口を押さえて嗚咽を堪えるような仕草を見せていた。長い睫毛は涙に濡れている。僕は思わず美羽の頬に手を伸ばした。美羽の頬を右手でそっと包むと、美羽は切なさずに顔を顰める。

空は何処までも広くかった。      手を伸ばしても、届かなくて。

「大丈夫？ 泣きやんだ？」

美羽の顔を覗き込むと、美羽は苦笑しながらうん。と呟く。少し腫れた瞳をこちらに向けて「ありがとう」と微笑した。

「一昨日ね、死んじゃったんだ。      あたしの、大好きな人」

心臓が大きく、飛び上がる。“死んじゃった”の言葉に身体が反応した。

シンジャッタダ。

その言葉がゆっくりと、僕の身体に沈んでいった……。

最期に、笑えるように。

「……ごめん。僕、帰らないと」

視線を彼女に合わせるのが、精一杯だった。

……ちゃんと、笑えてるかな。

震えそうになる声を必死で繕いながら、僕は彼女に微笑む。ギシツと顎の骨が軋んだ気がした。

「あ、そっか！ そうだね、ごめん」

彼女は慌てながら、僕に謝った。自分の右手に拳を作って、彼女は僕に差し出す。微笑む彼女から、受け取ったもの。彼女の体温に少し温められた、この場所の鍵だった。

「ありがとう。でも、いいの？」

僕がそう聞くと、彼女は頷いて「友達の証！ 実はね、もう一個持ってるの」と微笑んだ。僕はもう一度、ありがとうと彼女に告げて、逃げるように屋上から立ち去った。心臓が、波打つ。

“お前はもう、駄目なんだよ”  
違う。

“限界なんだよ、少し。休めよ”  
そんなんじゃない。

“どーせ、あと二年なんだ”  
やめろ！

心に、誰かの声が響いてる。それに合わせるように、視界がぼやけた。遠くに行ってしまうような意識を、必死で捕まえながら手す

りをつたつて、階段を下りる。

あと、もう少し。

もう少して、病室に戻るから……っ。

「……っ、はぁ……っく」

痛み出す心臓に手を当てて、額に滲む汗を拭う。

まだ、やっていないことがたくさん、あるのに……。

そこで、意識が途切れた。

『蓮』

何処からか、僕を呼ぶ声が聞こえた。      聞きなれた、低い声。

そう、これはきっと、北城の声。

僕ら二人だけが佇んでいる、真っ黒な世界。何も聞こえない、ただ“無”な場所。

「死んだのか、僕」

何も言わない北城は、僕が死んだことを肯定しているようだった。

「まだ、やりたいことがあるのにな」僕が、そう呟くと北城は悲しく微笑む。

『お前はその“やりたい事”を、やろうとしたのか？』

攻めるような口調では無いのに、北城の質問は僕の心に深く突き刺さった。

やりたい事を、やろうとしたのか？



やりたい事があるのに。  
しなきゃいけないことがあるのに。  
時間が無いって分かっているのに。

黙りこむ僕を、北城はじつと見つめていた。暫くの沈黙が流れた後、北城は溜息を吐いて「まったく、マジでお前……手のかかるダチだよな」と微笑った。

『お前が無駄にした今日は 昨日死んだ誰かにとっては、大切な明日だったんだ。現在は今、この瞬間にしか来ない。無駄にすんな、この時間を。この一日が一生を創るんだ。……がんばれよ』

\*

北城の言葉が頭に響いていた。目が覚めて、一番に視界に入ったのは真っ白な天井。

ピッピッと定期的になる電子音と、すすり泣く母さんの声。僕が「母さん」と問いかけると、真っ赤な目をした母さんが「蓮！」と僕に抱きついた。母さんの、優しい香水の香りが鼻をくすぐった。

母さん。

……怖い。死ぬのが。自分が、独りぼっちになってしまうことが。

でも、怖いからって、いつまでもびびってたら、終わりが来るよね。

せつかく、“終わり”が分かっているんだから、その“終わり”までを精一杯、生きるべきだよ。

やりたい事、全部やって、しなきゃいけないこと、全部終わらせる。

最期に、笑えるように。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0471d/>

---

それでも、僕は

2011年4月6日20時39分発行